

被爆77周年原水爆禁止世界大会・広島大会 8月5日フィールドワーク

～安野発電所への中国人強制連行・中国人被爆の歴史を歩く～

スクラムユニオン・ひろしま 土屋みどり

このフィールドワークは、昨年、一昨年とコロナ禍で中止となり、今回で6回目の取り組みとなりました。全国からは、長野県、北海道、東京から5名の参加者があり、スタッフとともに、暑さと時おりザッと降る雨の中、強制連行・強制労働の爪痕を辿って行きました。私もスタッフとして、お手伝いをしながら参加しました。

平和公園を出発し、最初に中国電力安野発電所で車を降りました。「継承する会」の事務局長である川原洋子さんから、収容所跡地など地図を見ながら説明を聞き、「安野 中国人受難之碑」に向かいました。急に雨が降り出し、傘をさして碑を見学しました。この碑には戦争末期、国内の労働力不足を補うため、中国から強制連行された中国人360人の方の名前が刻まれています。安野発電所建設工事で過酷な労働に従事し、満足な食事も与えられず、ケガをしても治療さえ受けさせてもらえず、広島での被爆死も含め命を落とされた29人の方の名前も刻まれています。碑には「こうした歴史を心に刻み、日中両国の子々孫々



の友好を願ってこの碑を建立する」と記されており、参加者は碑に手を触れたり、写真を撮ったりして見学しました。

碑を後にし、長い階段を上って坪野貯水槽まで上がりました。暑さと湿気の中、山道を50m登るのは結構大変でした。しかし、当時中国人たち



は、この階段を重たいセメント袋を肩に担ぎ何往復もしました。冬場酷寒の中でも、素足にセメント袋を巻いただけの状態で凍つく階段を歩いたということです。満足な食事も与えられていなかったため、体力がなくなり、セメント袋を落として袋が破れ監督に殴られた人もいたということです。

その後、善福寺に行き、藤井慧心住職から、中国天津で行われた法要の報告を受けました。

さらに、川原さんから、石を運び出す作業に使われたトロッコの模型を見ながら説明を受けま

した。



少し早い昼食を済ませ、善福寺を出発しました。津浪中国人収容所跡、西谷立坑、香草中国人収容所跡へと向かいました。収容所跡地では、当時の収容所の様子が語られました。衣服はボロボロで、寝床と言えば板張りにむしろを敷いただけ、布団とはいえない中国から持ってきた薄い布をかけて寝ていたこと、満足な食事は与えられず雪道を素足の人もいたという、本当にむごい、悲惨な生活だったということでした。

再び車で移動し、700mほど離れた香草の工事現場跡地に行きました。ここでは、トラックで石を運び出す作業中にけがをし両目を失明した宋継堯さんのことが話されました。水谷沈砂池を見学し、最後に土居収容所跡と取水口に行き、平和公園に帰ってきました。暑さの中でのフィールドワークで、参加者の方は大変だったと思います。それでも参加者の方たちは皆熱心で、質問もたくさん出て、フィールドワークにしっかり取り組まれていました。

10月23日には記念碑前で15回目の追悼の集いを開催予定ですが、2010年から2013年まで中国から受難者・遺族・家族を招いて追悼の集いが行われてきました。川原事務局長は

「和解事業として行われた訪日活動を通して、中国人の気持ちの中にあった日本への恨みが、現地を訪れることで変わっていった」と報告されました。その根拠として3つのことを挙げられました。「一つには、強制連行の事実を詳しく知ったこと。二つには、記念碑前で開催された追悼の集いで献花をし、集い終了後に紙銭を燃やして中国式の追悼を行い、善福寺の法要では線香を手向けて、心ゆくまで追悼したこと。三つには、記念碑が建立されて、自分たちの苦難が歴史として後世に残っていくことが、中国人の方たちの気持ちを変えた」と語られました。

この息の長い活動が、日本人と中国人が手を取り合って、日中友好、反戦平和を構築していく力になることを確信したフィールドワークでした。



土居取水口から滝山川上流を望む